

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：坂本 真司 作成日：2023年12月19日

1. 教育の責任

国際社会における様々な問題について、それがどのような問題なのか、なぜ起こるのか、どうすればよいのか、以上の3つの問いをめぐり、どん欲に知識を求め、真剣に、かつ粘り強く考え抜いて答えを見出そうと努める、真の意味で「意識高い」人間へと成長を遂げるよう、全力で学生諸君をサポートすることが使命だと考えている。

「国際 NGO の活動」(講義[オンデマンド型]、国際関係学メジャー必修科目、春学期、2単位、198名)

「海外援助技術論」(講義、国際関係学メジャー必修科目、秋学期、2単位、22名)

「ゼミナール I・II」(演習、春・秋学期各2単位、9名)

「卒業研究」(演習、通年、4単位、9名)

2. 教育の理念

国際問題を学ぶ際には、当の問題を「他人事」で終わらせないことが大切だと常に意識している。国際問題に対し、傍観者としてではなく、当事者として問題克服への道筋を皆で一緒に考えなければならない。このことを学生諸君そして私自身が繰り返し自覚できる機会として、授業を活かしていきたい。たとえば、今年度上記科目にて学生諸君の関心を強く引きつけたもののひとつに、援助のアイロニーと呼べる事態がある。一例として、いわゆる第三世界向けの古着寄付があがる。状態の悪い服が、先進国市民から侮蔑的に送りつけられる一方、現地社会ではすでに古着量が過剰で、処分に困ったあげく不法投棄され環境問題も起こしている。こうした善意の押しつけと呼べる事態を筆頭に、国際協力・支援のもつ問題性を捉えることで、国際問題の実態を多面的に把握し、その上でよりよい国際関係構築を展望するための場となることが期待される。

3. 教育の方法

方法上の基本的なスタンスとしては、国際社会のダイナミズムを、続くコロナ社会でも理解できる環境の整備を意識している。

たとえば「国際 NGO の活動」ならびに「海外援助技術論」では、ノート・テイキング用フォーマット・ファイル (pptx 形式) をエルキャンパスにて事前に配布し、活用を勧めている (強制とせず、任意活用と案内)。講義では、このフォーマットの完成版をスクリーンに映し (「国際 NGO の活動」はオンデマンド型なので、音声レクチャー付きコンテンツとして提供し) て、授業を進める。ノート・フォーマットは、スライド各所に伏字を設けて、それらにキーワードを充てることでノートを完成させることができるようになっている。スライド各部にて、YouTube 動画や関連ウェブサイトの URL を貼り付け、(持ち込み) 端末にてクリック、タップなどして、ノート作成とともに各種情報を参照できるようにしている。出席者は、設けられた時間にてこれらコンテンツの視聴や閲覧をする。

このノート・フォーマットだが、予習読本も兼ねている。授業各回で当日 3 日前に配布しているが、その際に予習読本として事前の読み通しを要求している。またその際に出てきた質問・意見もメールにて受付けている。実際に質問などの反応もあり、授業当日に紹介し、質疑応答や意見交換、討論に活かしている。(「添付資料」にて一部を見本として提供したい。)

4. 教育の成果

「3. 教育の方法」で取り上げた、ノート・フォーマットを用いた授業運営は、履修学生のあいだではおおむね好評であった。事前に自らのスタンスについて考え、授業に望めているのではないかと考えている。3 の末尾にあげているが、履修学生から意見交換の話題が持ち込まれることがあり、意見交換や討論が大変盛り上がることもあった。本学学生諸君は、比較的内向的な者が多いというのがかねてよりいわれているところだが、私の担当科目の場合、留学生や外国出身学生が話題提供や意見表明を率先しておこない、それに応じて日本人学生も積極的に発言するなど、場の盛り上がりが何度もみられ、刺激に満ちた授業が具現している。

5. 改善への努力と今後の目標

名称はふせるが、ある科目の履修にあたって、一部学生 (1 名ではなく、複数という意) から、「フィールドワークなどに行きたくないが受けてもよいか」という問い合わせや、学外実習は遠慮したいといったリクエストが寄せられた。初めての経験である。コロナ禍の影響か、

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：坂本 真司 作成日：2023年12月19日

違う背景からか、気になるところである。私見では、コロナの影響の長期化は必至と思われる。その中での教育活動において、教室でも国際社会の何たるかをつかめるきっかけをどんどん提供してゆきたい。このような状況だからこそ、学問に勤しみ、知識を武器にすることが重要なだと訴えてゆきたい。パンデミックも国際問題であり、学生諸君には、その下で暮らす大勢の人々の様々な困難を知ってもらいたい。これが実現されるよう努力したい。

【添付資料】

「海外援助技術論」第7回授業「環境問題と援助」ノート・フォーマット（ファイル名「no7_note_format」）

海外援助技術論

担当：坂本真司

第7回 環境問題と援助

前回おさらい

前回第6回は「教育問題と援助」として、開発途上国における教育問題に国際援助がどう対応してきたか、成果と問題点を交えて検討しました。要点をおさらいします。

教育問題をめぐる援助技術

技術指導

貧困緩和を目指す産業発展戦略

X X X X 高収量品種の開発と実用化

識字教育

自立的な開発を可能にする援助・支援

学校教育と **X X X X X X X** **教育**の拡充

今回の目的：環境問題をめぐる国際援助技術の理解

開発途上国の環境問題に対する国際援助の成果と問題点

具体例をとおして環境に関わる援助技術の実態を把握

輸入代替戦略の結末

開発援助の負の帰結 公害輸出惹起

環境保全運動

開発援助への現地住民の反発

オルタナティブな開発

住民主体の持続可能な経済

予備知識 開発と環境

経済成長と環境破壊

経済成長は環境破壊のリスク招く
つまり 開発援助は環境問題の温床

環境クズネッツ曲線

特定地域住民の平均所得があがる
すなわち当地で経済成長が進む
するとそれに並行して 当該地域の環境汚染が進む
しかし一定レベルまで成長が高まると
つまり環境汚染が進行する
すると今度は汚染の低下がみられる

曲線適応の困難

環境クズネッツ曲線は**閉鎖環境**を前提

現実 途上国社会は経済の x x x x x x の許にある

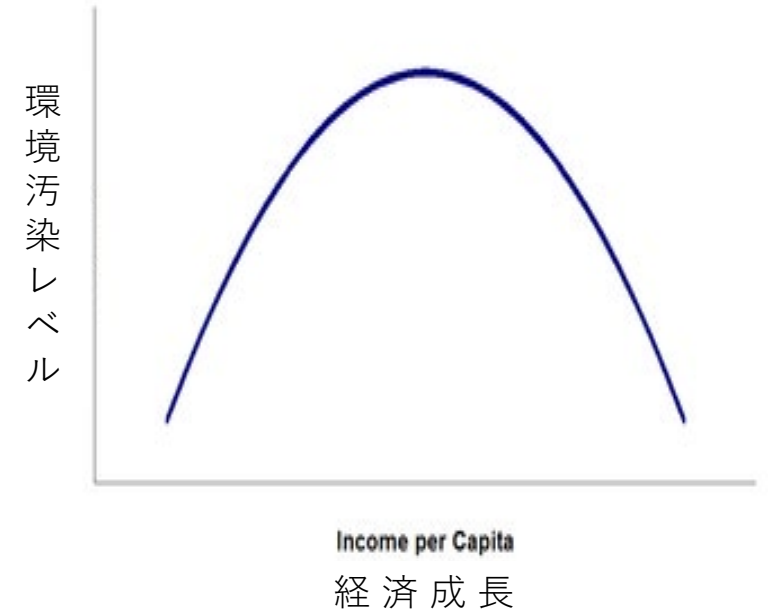


図1 環境クズネッツ曲線

開発途上国の輸入代替工業戦略

輸入代替（ゆにゆうだいたい）

従来輸入に頼っていた工業製品を自国で製造・供給

1960年代あたりから多くの開発途上国で進められた経済戦略

背景 農業国からの脱却

（相対的）余剰人口の雇用 農村から失業状態の若年層を動員
モノカルチャー経済を是正

モノカルチャー経済

特定の換金性の高い作物（輸出作物）に頼った経済体制
例）南米のアスパラガスやフィリピンのバナナなど

輸入代替の負の遺産

開発援助が招く「公害輸出（公害移転）」

公害輸出・公害移転：公害がある地域から他所へ移ること

公害輸出の x x x x x x

公害の x x x x

人件費安い、コストかからない x x x x x へ

開発途上国側も、経済成長のために、公害もろとも企業誘致

そこには現地政治家と企業の癒着、汚職も関係

事例：フィリピンのパサール銅精錬プラントでの被害

1980年代、フィリピン・レイテ島で日本の大手商社が多額の費用を出資し始まる。

採掘された銅鉱物を精錬し、銅を抽出する工程からは、大量の排煙が排出され、ヤシの木などの植物が枯れるほか、肺病を訴える人も出て、人体への健康被害ももたらされた。また、プラントからは大量の汚染水が海に垂れ流され、漁業被害も深刻化した。

住民らは精錬所やフィリピン政府ほか政府機関に対策を訴えたが拒否された。レイテ島当局やフィリピン政府は、経済発展のために公害のリスクも含めて企業誘致を敢行した。その背景には企業、商社からの政治家、役人への賄賂も疑われている。

日本の商社が出資していることからわかるとおり、精錬された銅は日本はじめ先進国で消費される。フィリピンで精錬をするのは、人件費が安いこと（安くして誘致する）、そして、日本はじめ先進国の産業アセスメント（各種公害規制）が厳しく、プラント建設に莫大なコストがかかわるからである。

公害輸出のその後を動画をとおして洞察

演習 1

YouTubeで、パサール銅精錬プラントを操業している企業のPVを閲覧

動画タイトル： PASAR - A Glencore managed company (3:37)

<https://www.youtube.com/watch?v=O3pXN-vrfi0>

プロモーション映像ゆえプラントがもたらす弊害は一切示されません。むしろ過去の被害を隠ぺいしようとする意図がミエミエのものとなっています。

「安全 (safety)」や「問題解決 (solve the problem)」といった言葉が現場労働者の口から出ていますが、これこそが巧妙性の最たるものと言えます。

環境保全運動

開発（援助）の負の帰結 公害輸出などの環境破壊

この帰結を受けて後に

対抗的事象としての開発拒否を謳う x x x x が各地で発生

開発反対運動

開発援助を x x する動きが先鋭化

事例) インド・ナルマダ川でのダム開発反対運動

1979年

インド西部に流れるナルマダ川流域のダム開発が政府より計画化

1985年

世界銀行とインド政府 開発資金調達で合意

サルダルサロバルダム開発プロジェクト具体化

以後 日本政府はODAプロジェクトとしてダム開発に参画

同時に **現地住民のダム開発反対運動が盛り上がり見せる**

1990年

ダム開発中断～日本のODA撤退

現在、再開めぐり問題くすぶる

演習2

YouTubeにはいり、下のタイトルで検索、動画を閲覧しましょう。

タイトル

Sardar Sarovar Explained: The Benefits and The Harms-The Quint (3:42)

<https://www.youtube.com/watch?v=rU5iuEm-meA>

上記コンテンツには、サルダルサロバルダム開発プロジェクトが生まれ、最終的にダム建設が中断されるまでの経緯、住民の反対運動Narmada Bachao Andolanの動き、そして今後の行方に関わる情報が整理された形で示されています。

オルタナティブな開発

反開発運動からの新たな展開

現地住民らによる環境保全運動すなわち反開発の運動を契機に
オルタナティブな開発を目指す運動が生まれる

オルタナティブな開発 (Alternative Development もうひとつの開発)

効率性を最優先にする **x x x な開発の否定**

地域環境との共生を目指し、自分たちの生命を守るための開発の模索

環境の x x x (sustainability) を **産業化** (近代化) に優先

どうやって? **x x x x の x x x x**

事例) インドのチプロ運動

1973年 インド北部UP (Uttar Pradesh) 州ガルワール地域

森林からの木材切り出しに関するトラブル発生

州の森林局が当地森林での木材伐採・使用権をスポーツメーカー（クリケット用品）に認めた。大量の木材が切りだされると、地元住民の収入源が断たれる。そこで同年以降住民らは、資源管理の権利は伝統的に自分たちにあるとして、伐採反対運動を起こした。

チプロとはヒンディー語で「抱きつく」という意

住民たちは伐採業者に対し、木々に抱き着くことで伐採を止めた。これがメディアの目にとまり、報道されると世論を喚起した。国際的にも知られるようになり、**世界各地からの環境保護団体、開発NGOなどからも支援が続いた。**

1980年代以降チプロ運動は、**森林保全に加え植林もおこなう、周辺の河川からの用水設備を整えるなどして、地域自然資源の管理の多様化をはかる。**そうして後にインド中央政府から、これら管理の権限を公的に認められることとなった。

演習3 チプロ運動について動画をとおして理解

各人YouTubeにはいり、下のタイトルで検索、動画を閲覧する。

「Why we need more Chipko movements?」 (3:26)

<https://www.youtube.com/watch?v=DjgoFh4uaCl>

地域資源管理を自主的に進めるチプロ運動は、単なる環境保全運動にとどまらず、環境の持続性と自らの生活すなわち生命を守るオルタナティブな開発の走りとして位置づけられます。その成功の過程をこのコンテンツは示してくれています。

次回は

次回第8回は「保健・衛生問題と援助」と題してお話をします。パンデミックなどの現代的な事例も含めて、開発途上国の健康問題に対し、開発援助はどのようにアプローチし、どのような成果をあげ、また問題を残したかを検討します。そのようにして、各時代の援助技術について、それぞれの意義を吟味します。